

県内文化

美術

野中 耕介

美術の様相―美術史

したが、約束された間をわたって、そんな磁場は30年もの間、かのごとく綿々と主流気概を持ち続けた作家たちが集団である。今表を続けてきた。しかきたことは周知の事実である。年の展示(8月、佐賀市立図書館)では、同グループの創設者であり、昨年没した故・真子達夫の初期から晩年までの作品が並んだ。度問い直すべき時にきているのではないか。

美術の内容と方向性を決定付けるのは、つまりとこの表現と「人脈」の二つである。私は考えている。すなわち、誰が誰と関わり、どのような表現が生まれてきた(ある)のか。

しかし、その実相はそう単純ではなく、特に戦後の表現と人脈は重層的である。アカデミズムが強固であればあるほど、それに与しない思想や表現を志向(960年代)は、厚塗とその権威は、従来と

「反逆児」たちの「磁場」

つめてゆくこと

は、美術史の本質を知り、その姿、形式が微妙

るものも重要な手がかりになるのではないかと思うのだ(私が常々美術教育とその教師、指導者に代わるもののためである)。佐賀県の洋画の場合、おそらく他のあらゆる「地方」と同様、明治以来もたらされた中央のアカデミズム戦後は、日展系といふことばで人口に膾炙

「アートグループ磁場」は、結成以来30年

文化時評 2009

(県立美術館学芸員)